

「お嫁さんだあ！看護婦さん、きれいだね。私も早くお嫁さんになりたい。

長女・景子（当時6歳）は、本当に嬉しそうです。3歳で発病した小児がんが進行し、車イスの生活になっていました。その日は、大好きな看護婦さんの結婚式。看護婦さんたちが連れてきてくれたのです。みんな知っています。景子はお嫁さんが大好き、そして、あと数ヶ月で天国に行くことを…。

2ヵ月後、ついにターミナルを迎えます。「お母さん、泣いてちゃだめですよ。景子ちゃんは今も、がんばっているから」と、婦長さんが妻を励ましてくれます。

体ふきをする時に、看護婦さんが言いました。「あれ、このタオル少し冷たい。景子ちゃんは、冷たいのは嫌だよ」。そして、タオルを交換してくれます。また、別の看護婦さんが、昼食を持ってきて、「景子ちゃんの大好きなハンバーグだよ。看護婦さんたちが旗を作ったからみてね」と、声をかけてくれます。

景子は、大量の鎮静剤で眠った状態です。もう何も感じていないことは、全員が分かっています。私は、濃厚治療や心臓蘇生マッサージなどの延命治療はしない。安らかに看取

りたいと医療スタッフに伝えていました。

看護婦さんたちの姿に気づかされました。私は、いかに安らかに看取るか「尊厳ある死」を考えていた。看護婦さんは、今を大切にする「尊厳ある生」を思っている。尊厳ある死は、尊厳ある生の向こうにある。今は、大切な人に寄り添い、気持ちを分かち合うことが何よりも大事なんだと。

1995年7月5日、午後8時24分。たった一人で天国にいきました。「殺した…」。病気を見つけれなかった、治せなかった。自責の思いが押し寄せます。

しばらくすると、看護婦さんが、「お母さんも、景子ちゃんをきれいにしておあげてください」と言われます。手には小さな化粧箱。死化粧です。景子の容姿は、すっかり変わり果てていました。

妻は、看護婦さんに教えられて、景子に頬紅や口紅をします。娘の表情とともに、妻の心も安らかになっていくのを感じました。看護婦さんは、慈愛の眼差しで凜として最後のケアを続けます。

通夜に、看護婦さんたちが来てくれました。「景子ちゃんのいのちは短かったけれど、お

父さんお母さんの一杯の愛情の中で、幸せだったと思います」と言ってくれたのです。本当に、救われた思いでした。その言葉は、今も決して忘れません。

景子が旅立って、もう15年以上がたちます。いのち、生と死、家族、医療とは何かを答えもなく何度も何度も思いました。

今、私の体験と思いを語る「いのちの授業」やセミナーを、学校、行政、医療機関、企業などでしています。いのち・家族の絆・良き医療などをみつめるものです。6年間で13万人の方が参加されています。

特に、看護関係では、患者家族の目線から、いのちをキーワードに、その思い・ターミナルケア・グリーフケア・医療の質などをお話します。それらを体系化した臨床いのちの講座も開講（名古屋市立中央専門看護学校）しています。いのちへの確かな思いのある医療者になってほしい、そんな思いです。

講演の最初に必ずお伝えします。「医療専門職である看護師の使命とは何ですか?」「いのちを支え守ることに尽きます。その思いを果すために何をすべきか、自分に問いかける

ことを大切にしてほしい」と。

いのちを支え守る看護師には、3つのことが求められています。「医療専門職としての確かな技量」。治してほしい、患者家族の一番の願いです。「厳しい現場で凜と行動するための覚悟」。どんな時も支えてくれる人がいる、それが安心になります。「涙する患者家族に寄り添う人間愛」。医学は科学。でも科学だけでは心は癒されません。医療は人間愛です。

景子や小児がんの子どもたちから何度も聞きました。「看護婦さん、いつも優しいね」と。

それは、自分のいのちを支え守ってくれている、看護婦さんへの心からの感謝の言葉です。そして、技量・覚悟・人間愛に裏付けられた看護ケアへの信頼の証なのです。

医療現場には、たくさんの課題や困難が、日々押し寄せます。つい目先のことに心が奪われていきます。だからこそ、いのちを支え守る思いを、医療者一人ひとりの心に刻んでほしいと思います。

看護師は、いのちを輝かすことができる、素晴らしい仕事です。「看護師さん、いつも優しいね」。その言葉が、ベッドサイドに満ち溢れることを念じています。